共研務の部屋

子どもキャンプ、ふたたび

戸澤　由美恵（元高崎健康福祉大学准教授）

「草津楽泉園とみちのくの子どもをつなぐ会」スタート

ぐんま教育文化フォーラムのみなさん、お久しぶりです。

以前、国立療養所栗生楽泉園でおこなった“楽泉園サマー生活楽校”（以下、子どもキャンプ）の活動を紹介していただきました。その後をお伝えしたいと思います。

2012 年、楽泉園自治会（藤田三四郎会長、研（こだま）雄二副会長）の発案とご要望で「草津楽泉園とみちのくの子どもをつなぐ会」を発足、原発被害を受けている福島の子どもたちの保養とハンセン病の啓発を目的として始まった企画です。

研さんの訴え

研さんの言を借りれば、「（前略）実は私たち楽泉園の入園者自治会もその支部として加盟している全国 13 の国立ハンセン病療養所入所者協議会（全療協）は、3・11 大震災・原発被害者救援にはいち早く義援金を募って送り、2か月後の5月には支部長会議を開き、療養所内への避難や仮設住宅建設受け入れを決定、これを厚労省も認めていたからです。ですが、現実には未だにハンセン病に対する社会的偏見・差別が根強いためか、東北地方の青森や宮城の療養所さえ一片の要望すら寄せられていません。（中略）私達に犠牲を強いたのは国の誤ったハンセン病政策です。私達が提訴した違憲国賠訴訟での熊本判決は、「原告の被害は人生そのもの」と厳しく国を断罪しました。しかし判決で認めた私たちに対する「被害回復」の法的責任を、国は一向に果たそうとしていないのが判決以来 11 年目に当たる現状です。もちろん原発事故も完全に国の過ち以外のなにものでもありません。世界で唯一の原爆被爆国日本が、性懲りなくアメリカのいうなりに引き込んだ原発の事故で、再度国民に放射能被害をもたらしたばかりか、私たちと同様に被害者からふるさとを奪い、放射能汚染問題で人権や生活に直接関わる種々深刻な偏見・差別まで生じさせているのです（後略）」（『死ぬふりだけでやめとけや研雄二詩文集』2014 年掲載　「連帯することの意味」みちのく応援隊会報第 3 号　2012 年 6 月　より引用）ということでした。

療養所を「人権のふるさと」に

子どもキャンプでは、子どもたちがドッジボールやおいかけっこ、流しそうめん、スイカ割りなどの屋外での活動と、放射能を気にせずに楽泉園内を見学することの両方を楽しみ、ありのままを見て、入所者と接して話して、感じ考えることを大切に関わってゆこうとしました。研さん曰く、「この子たちが大人になったときに、あんなところに行ったな、こんな人たちがいたな、こんなことを言っていたなと思いだしてくれたらいい。それが一番の人権教育だ。子どもたちには（自分たちのように）偏見や差別に負けず強く生きていていってほしい」と（いうようなお話をされた）。療養所を「人権のふるさと」にしたいと考えていた研さんらしい発想です（詳しくは「人権のふるさと論」をご参照ください）。

息を潜めたコロナ禍の日々

以来、2019 年 8 月まで毎年、地元群馬県の大学として学生たちと一緒に実施してきました。しかし、2020 年はコロナ禍のために、療養所では入所者の外出は制限され訪問や面会も不可、ほとんどの行事が中止、園内への立

ち入りや見学もできません。（たぶん、入所者や園にとっても不本意ながら）強制収容隔離の再来と言っても過言ではない状況となったのでした。みなさんも、学校関係や医療・福祉施設関係の大いなる混乱を、身をもって体験されていたことと思います。社会活動もいろいろなものがストップし、息を潜めるような年でした。

それでも、高齢な入所者にとっての１年は非常に重い。子どもたちに会うことを楽しみに待っている方々…なんとか、開催できないか。しかし、高齢であるがゆえ子どもに近く接することはリスクが高い。ワクチンが開発され接種が進んでも万能ではなく、と話はいつも堂々巡り…そのような中でも、重監房資料館や社会交流会館が人数制限をしつつ徐々に見学を開始、納骨堂までのお参りが可能になり、一定の条件を満たせば病棟の面会も可能となりました。それでも、まだ今夏も子どもキャンプは開催できませんでした。

オンライン交流「おはなし会」が実現したが谺さん、藤田さんはいない

子どもキャンプスタッフ間では、これまで参加した子どもたちや保護者へどんな形でなら参加や協力が可能かアンケートを実施したり、粘り強く探っていきました。やっと園のインターネット環境が整い 2021 年 8 月 17 日に子どもたちと入所者をつなぐオンライン交流「おはなし会」が実現しました。子どもたちからはキャンプの思い出や入所者への言葉、近況を綴った手紙と写真などが 8 通も寄せられ、事前に、園のソーシャルワーカーたちがコピーをとって入所者に渡してくださり「この子はもう高校生になったのかい」とか「ゲートボール一緒にやったねえ」とか「お習字頑張っているんだってよ」などと、楽しみにしてくださっていたようです。当日は、小学生から大学生の子ども 4 名と入所者 5 名、スタッフ 6 名が参加し予定の 1 時間があっという間に過ぎてしまいました。小学 4 年生から毎年参加した子どもは大学生となり「楽泉園での経験から、地域づくりを学ぶ学部へ進学しました。将来は公務員になって誰もが生きやすい社会づくりに貢献したい」と。谺さんの蒔いた種がどんなふうに実ったのかを、我々スタッフが実感できた時間でした。残念ながら谺さん、藤田さんはもういません。これまでの 10 年を振り返り、これからの 10 年をまた考えていかなければなりません。

ご無沙汰している間に

ご無沙汰している間に、新たなウィルスとの戦い、数々の大きな自然災害、そしてロシアの侵攻からの戦争まで始まってしまいました。その後…といえば私事で恐縮ですが、教員としての戸澤はこの 3 月をもって高崎健康福祉大学を卒業いたしました。

偏見・差別・戦争

映画『福田村事件』を観ました。これも、語らなければ「無かったこと」にされてしまう史実です。語る側も語られる側も血を流し痛みを伴う、そんなことがいくつあるのだろうか…。偏見も差別も戦争も、こんなに心がつかれることはもう終わりにしてほしい。

草津町観光を楽しみました